
メフィストーフェレ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メフィストーフェレ

【Nコード】

N39140

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

高名な老科学者ファウスト博士を悪魔の側に引き込もうと決意したメフィスト。彼は博士に近付きその助手となり行動を共にしていき。ゲートの永遠の名作をボーイトがオペラにした作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

メフィストーフェレ

第一幕 若返り

天界。青い空の下に白い雲が広がり眩いばかりである。太陽の光は黄金色でその中で天使達はその清らかな声を奏でさせていた。

「我等が神よ」

「天におられる神よ」

「幸いあれ」

こう歌っていくのだった。

「黄金の翼で飛び交う」

「宇宙の未来の永劫の調和にはじまり」

「青い大空に滲み込む」

歌はそのまま続いていく。

「至高の愛の歌声が響き」

「この歌声は主の御前に紺碧の深い大気を抜けて

「妙なる楽の音となって立ち上る」

「幸いあれ！」

さらに歌う彼等だった。

「幸いあれ！」

「我等の主よ！」

「さて」

その中に場違いと思える存在がやって来た。赤いタキシードに蝶ネクタイ、それに赤いバイオリンケースに靴、の男である。ワックスで八の字に固めた口髭にやはり奇麗に固めた顎鬚、髪は端整なオールバックである。髭も髪も黒い。目は吊り上がり顔は険しい感じである。その彼が出て来たのであった。

「あつ、メフィストだ」

「メフィストーフェレ」

「何の用なのかな」

「さて天界の主よ」

メフィストはまず恭しく一礼してから述べてきた。優雅で礼儀正しい仕草である。足も揃えバイオリンケースはその足元に置いたうえでの一礼である。

「宜しいでしょうか」

「仕事でここに来たのかな」

「やっぱりここに」

「そうなのかな」

「まずは近頃私が神の御名を言わないのをお許し下さい」

「このことを言ってきたのである。」

「それはです」

「それは悪魔だからね」

「まあ仕方ないんじゃないかな」

「そうだよね」

小さな天使達はその彼のことを話す。

「それは」

「悪魔だと」

「私の頭にはもうあの輝きはありません故」

その光輪のことである。

「それで口笛を鳴らしたら御容赦を。そして」

「そして？」

「今度は何かな」

「近頃です」

こう話してきたのである。

「地上は何かと物騒なことですがそれでも何かと賑やかではありません」

「人間達の話だね」

「そうだね」

そのことを言う天使達だった。

「そのことを言ってるけれど」

「その人間達を誘惑するのが仕事じゃないのかい？」

「悪魔のね」

「そうだよね」

「理性やそういったものにこだわっています。それもどうかと思うのですが」

「メフィストよ」

ここで神秘的な重厚な声が聞こえてきた。

「ファウストを知っているか」

「帝国にいるあの老学者ですか」

「そうだ、あの男だ」

「はい、知っております」

こうその声に応えるのであった。

「あんな変わり者はありません」

「変わり者だというのだな」

「その変わった性格に相応しいやり方で貴方様にお仕えています」
そうしているというのである。

第一幕その二

「抑え切れない知への熱望が彼を不幸と焦燥に駆り立てていますが」
「若い頃だな」

「そうです。彼はです」

ここでメフィストの言葉は醒めたものになった。

「そのまま出来るなら人を超えたいのですが」

「人をですか」

「そうです、人をです」

「そうだというのだ。」

「どんな学問でも限りはあります。どれだけ思おうとしてもです」

「それには気付かないのか」

「私はそんな彼にです」

ふとファウストに興味を抱いた言葉である。

「網にかかるようにできますが」

「出来るならすることだ」

声はこう言ってきた。

「それならだ」

「それでは」

メフィストはそれを聞いて我が意を得た顔になった。そのうえでまた述べた。

「では私はそうしましょう」

「好きにするがいい」

「さて、主の御考えはわからぬが」

メフィストはそのことへの詮索はあえてしなかった。ただし企む笑みはそのままであった。

「それでもよい。それでは早速仕事にかかるとしよう」

「さてさて、どうなるか」

「面白いことになってきたけれど」

「最期はどうなるかな」

天使達メフィストがバイオリンケースを手に取ったのを見てからまた話した。

「それで」

「一体」

「天使達の声はだ」

メフィストはその彼等の声を聞きながら呟いた。

「どうも肌に合わないな。長い間聞いているが」

「そういう君だっけか。ここにはここにいたじゃないか」

「そうだよ」

「それでも今はそうなんだね」

「帰る時ではないからな」

その天使達への返答である。

「だから今はな」

「何だよ、つれないね」

「そんなのだと」

「最後の審判まで待つてるなんて」

「決まりは決まりだ」

メフィストは端整に述べた。

「最後の日まで私は同志達と共に地上に留まる」

「じゃあその日までね」

「こうして付き合いを続けるんだね」

「律儀だね」

「律儀なのは私と同志達の絶対の戒律だ」

天使達に対しても礼儀正しい。

「だからだ。それは破らない」

「約束には厳しい」

「それはいいことだね」

「では今から行って来るとしよう」

こう言ってであった。

「それではだ」

「じゃあね」

「また会おうね」

こうして彼は天界を降りてそのうえで地上に向かう。向かう場所は帝国の街フランクフルトであった。そこに向かうのであった。

フランクフルトの酒場は賑やかである。重厚な檜の木の酒場は質素であるがそれでも頑丈であり椅子もテーブルも独特の雰囲気醸し出している。

その中において様々な者達がビールにソーセージを楽しんでいる。ビールにしても黄金のものもあれば黒のものもある。誰もが木の杯の中のそれを愛していた。

「酒こそは永遠の友人だ」

「これがなくて生きていられるものか」

「まず飲まなくてはな」

こう話しながら飲んでいく彼等だった。

第一幕その三

若い娘達も飲みながら踊っている。そうして人生を謳歌している。

「柔らかい四月の光」

「この輝きの中で」

「若さと艶やかさを楽しみましょう」

「そうさ、飲もう」

「是非共」

若者達が彼女達に話す。

「皆で飲もう」

「明るく楽しく」

「やあ、楽しんでるな」

「では我々もだ」

「楽しませてもらう」

兵士達と老人達も店の中に入って来た。そうして早速飲みはじめ
る。

「まずは飲んで騒いで」

「さあ、お坊さん達も来たぞ」

「飲もう飲もう」

今度は修道僧達も来た。彼等も明るく飲むのであった、

「皆で」

「ビールを愛そう」

「酒とは何か」

ここで言うその修道僧達であった。

「それは全てである」

「人生の喜びである」

「神はそれを飲むことを許されました」

そう言つてそのビールを飲む。あらためてである。

その店の外に二人の男が通り掛かった。一人は長い白い髭を生や

した老人である。背は高く背筋も伸びているが老いは隠せない。学者の黒い服を着ている。その横にいるのはいささか小柄で白い服を着ている。白い服の男の方が二十歳程若い感じである。

その彼等がだ。酒場の賑わいを聞きながら話をしていた。

「いいものだな」

「そうですね」

白い服の男が老人の言葉に微笑みと共に応える。

「とても」

「全くだ。私もだ」

「どうぞされました、ファウスト博士」

「この甘美な春の光に氷は崩れ」

まずはこう前置きをするファウストだった。

「既に希望豊かに谷には緑があるが」

「はい」

「冬は山の中に去りそれに代わりたい洋画自然の姿と彩りを明るくし活気付けている」

こう語っていく。

「木々の花々はまだ蕾みを見せていなくとも」

「それでもですか」

「そうだ、それでもだ」

ファウストの言葉は続く。

「至高の光が祭日に寄せて着飾った街の人々を誘い出し花と戯れさせている」

「若さですね」

「私にはもうないものだ」

ファウストはここまで話して寂しい顔になった。

「最早な」

「しかし博士」

「何だワグナル君」

ワグナルが彼に憂いのある顔で言ってきた。

「博士と共にいるのは私にとって光栄ですが」

「私はただの老人だが」

「私にとっては永遠の師です」

そうだとするのである。

「その博士とこうして歩けるのは素晴らしいです」

「ではこのまま共に歩いていくのか」

「ですが」

しかしここでさらに話してきたワグナルだった。

「それでもです」

「それでも？」

「私は人ごみは苦手です」

「では去るといふのだな」

「できればここは」

まさにそうだといふのである。

「是非共」

「わかった」

それを聞いて静かに頷くファウストだった。

「それではだ」

「はい、それでは」

こうして二人はその場を去った。その酒場の中からまた賑やかな声が届いてきた。

「さあ飲もう」

「そうだな。どんどん飲もう」

「楽しもう」

こう言っただけであった。さらに飲んでいく彼等だった。

第一幕その四

「酒は幾らでもある」

「幸せもまた」

「それはこの世にある」

「さあ飲もう」

こうして飲んでいってである。さらに話すのであった。

「踊ろう」

「皆で楽しもう」

「これからも」

彼等は楽しんでいた。それが逆にファウストは。寂しい顔で自分の家に向かっていた。そこでまたワグナルが彼に声をかけてきたのであった。

「博士」

「どうしたんだい？」

「もう夕暮れですね」

時間のことを言ってきたのだ。世界は赤くなっていた。ファウストが先程褒め称えたその太陽は沈もうととして赤い光を放っていた。

その中にいてだ。さらに言う彼であった。

「もう亡霊達の時間です」

「そうだな」

「そして地上に霜が立ち込めます」

「春だというのにな」

「春でも黄昏です」

晴れやかな時は終わる。そういうことだった。

「ですから」

「家に戻るか」

「そうだな。ところで」

「ところで？」

「何か妙なものを感じないか」

こうワグネルに言ってきたのである。

「どうも」

「そうでしょうか」

「誰かがいる」

こう言うのである。

「あそこにだ」

「あそこにですか」

「そうだ、野原にだ」

ファウストは野原を指差していた。今は赤い光に照らされているその野原である。そこを指差してそのうえで言っているのだった。

「灰色の服を着た僧侶をだ」

「何も見えませんが」

だがワグナルはこう返して首を傾げるだけだった。

「別に何も」

「いや、見えていないか」

「そう言われれば」

ここでワグナルも見た。そのフードを被った僧侶にだ。見れば確かにそれはいた。一人の原を彷徨うようにして歩いているのである。

「あれは」

「妙な動きだな」

ファウストはその彷徨う僧侶を見て呟いた。

「妙な歩き方をしている」

「ただ彷徨っているだけでは？」

「いや、違うな」

そうではないというのである。

「あれはだ」

「あれは？」

「一見彷徨い朧な螺旋を描いているようで」

「そうではないと」

「そうだ、違う」

また言うファウストだった。

「こちらに近付いて来ている」

「そうなのですか」

「何か蜘蛛か」

「蜘蛛ですか」

「そうだ、蜘蛛だ」

それだと言う。

「罨を仕掛ける様な動きだな」

「ですからそれは気のせいでは」

「だといいがな。それではだ」

「はい、帰りましょう」

「家までな」

二人はそのままファウストの家に帰って行った。その後ろでは街の人々の賑やかな声が聞こえてきていた。二人のその後ろからあの灰色の僧侶がついてきていた。

第一幕その五

ファウストの家は極めて質素だった。彼の部屋もである。あるのは書と様々な研究道具だけである。他には何もなく彼の部屋も窓と扉、それに机以外には書があるだけである。本棚は一杯でうず高く積みまれてもいる。そんな部屋の中に彼は一人でいた。

「夜の忍び寄る野から牧場から」

彼は机に座り書を手に呟いていた。

「物音が絶えた小道を帰ると私はここで安らぎと深い静けさと聖なる神秘に満たされる」

そのことに満足しているのだった。

「胸の中の激情は収まり静かな忘却となり」

そしてその言葉を続けていく。

「ただ人への、神への愛が私の心に熱く燃える。野から牧場から帰るとひたすら福音の書に惹き付けられて私は物思いに耽る」

こう言っているのであった。何時の間にか部屋の中に彼がいたのであった。

「君は確か」

それはあの灰色の僧侶であった。彼がいたのだ。

「あの僧侶か」

僧侶はフードの中の顔を静かに頷かせた。それだけであった。

「何故ここに。若しやだ」

その不吉な印象からすぐに察したのであった。

「悪霊か。それとも亡霊か」

「いえ」

ここでその僧侶ははじめて口を開いてきた。そうして言うのであった。

「どちらでもありません」

「どちらでもないというのだ」

「まずはです」

「こう言つてであつた。その法衣を取る。するとあの赤づくめの紳士が出て来たのであつた。」

「はじめまして、博士」

「洒落た服だな」

「今のお気に入りの格好でございます」

「恭しく一礼しての言葉である。」

「私の」

「君のか」

「左様です」

「それで君はだ」

「ファウストはその彼に対して問うのだった。顔は自然に怪訝なものとなつている。」

「何者なのだ」

「その質問は愚問かと」

「愚問だというのか」

「左様です。言葉の議論よりも」

「生粋の学者であるファウストへの言葉である。」

「物事の本質を信じれおられる方としてましては」

「名前には本質を示す効能がある」

「それは知っています」

「ならばだ」

「ここまで話してまた彼に問うのであつた。」

「君は何者だ」

「では名乗りましょうか」

「うむ」

「私はです」

「ここでようやく名乗りだしたのであつた、それは。」

「常に悪を考えながら」

「悪をか」

「善を行うあの力を具現化する力の一部分です」
「善をか」

「そうですね。悪を考えてです」
明らかにファウストを試す言葉であった。

「さて、私は何者でしょうか」
「おおよそのことはわかった」

ファウストは男を見据えながら述べた。
「しかしだ」

「しかし？」

「君の口からそれを聞きたい」
微笑んでその赤い紳士に告げた。

「是非共ね」

「おや、私を試されているのですか」
「それで怒るならそれでいい」

こうしたことと言ってみせるファウストだった。
「それならそれでね」

「ふむ。それではです」

「名乗れるかい？」

「無論です」

悪魔も思わせぶりな笑みで彼に言葉を返した。

第一幕その六

「それではです。私は」

「君は？」

「靈です」

「まずはこう言ってみせたのだった、

「常に全てを否定する靈です」

「全てをです」

「そう、星や花さえです」

「そういったものをだという。」

「私の嘲笑や言葉はあらゆるものを惑わし」

「ふむ」

「無を欲し崩壊を愛します」

「創造ではなく」

「崩壊から創造が生まれます」

「これはいささかインド的な言葉であった。」

「罪を呼ばれるものこそ、つまり死と悪が私の拠って立つ領域です」

「それは」

「私は笑って無造作に言います」

「何と？」

「否、と」

「にやりと笑って否定の言葉を出してみせた、

「私は苦しめ試し唸り怒り否と言います」

「否定するのか」

「噛み付き甘言で誘い苦しめ試し」

「その言葉を続けていく。」

「怒号し口笛を吹きます。こうしてです」

「ここで実際に指を唇に挟んで鋭い口笛を吹いてみせる。」

「それからまた。言うのであった。」

「私は偉大な一切、即ち闇のほんの一部です」
「闇の」
「暗黒の中にいる暗黒の申し子です。そう」
「何と？」
「最後の審判のその日まで」
「またにやりと不敵に笑ってみせたのだった。」
「私は全てを否定しましょう。ですが」
「ですが？」
「貴方が私と契約されるならばです」
「契約をすれば」
「その時は喜んで御受けしましょう」
「ここでまた恭しく一礼してみせた。」
「そして私は貴方と共にいきましょう。僕として」
「その代わりにだ」
「ファウストは彼のその話を聞いたうえで問うた。」
「私はどんな条件を呑まないといけないのだい？」
「それを言うのはまだ早いのでは？」
「いや、今のうちに聞いておきたい」
「こう返したファウストだった。」
「それをだ」
「それをですか」
「うん。それで何なのだ、それは」
「メフィストに対して問う。」
「その条件は」
「私はこちらでは貴方にお仕えし」
「うん」
「そして不眠不休で駆け付けます。そして」
「向こうの世界では」
「そういうことです」
「今度は一こりと笑っての言葉だった。」

「それで如何でしょうか」

「あちらの世界のことはいい」

それはどうでもいいというのである。

「それはね」

「それでは」

「若し君が私の魂を静められるような無為の一時を私に提供してくれるなら」

「その時は」

「また私の曇ってしまった考えに私自身と世界を明示してくれるなら」

「こつ言葉を続けていく。」

「過ぎ去る一瞬に向かって止め、御前は美しいと言つのなら」

「その時こそですね」

「私は死んでもいい」

その時こそ、ファウストは言った。

「そしてこの身を地獄に飲み込ませてやるつ」

「それでは」

「契約を」

お互いに手を出して握り合う。これで決まりであった。

「ではこれで私は博士の」

「そうだな。ではこれからは」

「宜しく御願います」

また恭しく一礼する悪魔だった。ファウストは彼のその一礼を見てからまた問うてきた。

「それでだが」

「それで？」

「何時からだ？」

「こつ尋ねるのだった。」

「何時はじまるのだ？それは」

「すぐに」

これがメフィストの返答だった。

「今すぐにだ」

「わかった。では何処に」

「お好みの場所なら何処にでも」

「ここでもにやりとした笑みを浮かべてみせる。」

「御案内致します」

「馬や馬車、馬丁といったものは」

「そんなものは不要です」

「では魔術で」

「そうです」

まさしくそれだと言う。そして言うのであった。

「私は人間の思考より早く移動できるのですから」

「だからか」

「はい、それではまずは」

ファウストに魔法をかけ若さを取り戻させた。彼は若い日の長身で引き締まった身体をしている美男子になった。銀色の髪に北欧のそれを思わせる端整な顔をした若き日の彼に。そうなってみせたのである。

第二幕その一

第二幕 マルゲリータ

緑の庭である。エメラルドグリーンに輝いている。

周りの木々も日差しで美しく光りその周りには紅の薔薇が咲き誇っている。

その中においてファウストは金髪碧眼の初々しい美女と会っていた。彼は今は若い騎士の服とマントを着ている。色は青だ。それに対して美女は二重の流麗な瞳をしていてそのうえで高い鼻と紅の肌に唇を持っている。彼女の服は白だ。青と白の対比が緑の芝生にある。

そこで彼女は。ファウストに対して言っていた。

「騎士様」

「何でしょうか」

「私の名はです」

「はい、それは」

「マルゲリータといいます」

その清らかな声での名乗りだった。

「この私がどうしたら貴方様の御心を惹けるでしょうか」

「真紅のその唇から」

ファウストは優しい笑みで彼女の言葉に答えた。

「並ならぬ美しい言葉を聞かせて下さることで」

「それだけで宜しいのですか？」

「はい、それだけで」

いいというのであった。

「ですから是非」

「それだけで」

二人はそんな話をしていた。そしてその間メフィストは頭の角だけを隠した端正な容姿で黄色い服の女に対して声をかけていた。ブ

ラウンの髪に緑の目の女にである。

「マルタさん」

「はい」

まずは彼女の名前を呼んでみせてから話すのだった。

「一人ならばです」

「一人ならば」

「素晴らしい冒険を探してそのうえで世界を股にかけて激しく回るのもいいものです」

「それはまた」

「ですが」

ここでメフィストはこうも言うのだった。

「やもめで歳を取り痛ましいその日が来たら」

「その日は」

「孤独の床で死ぬものです」

そうなるというのである。

「残念ですが。ただ」

「ただ？」

「その日を思うと私は不安を覚えています」

「不安をですか」

「そうですね、覚えてしまいます」

そうだと話す。

「残念なことに」

「ですが貴方は」

「私は？」

「そのことにはまだまだ時間がありますよ」

「そうですね、確かに」

笑って話す二人であった。そしてファウストとマルゲリータもさらに話をしていた。

「それでなのですが」

「それで？」

「私の憤みのない言葉をです」

こう話してきたのであった。

「魅惑の奇跡の様な貴女のお顔が目の前に見える」と

「その時は？」

「この口に出て来た無遠慮な言葉をお許し下さい」

「それはありません」

それはないのだと返すマルゲリータだった。

「私です」

「貴女は？」

「苦しみ悩みです」

そう話していく。

「不安を感じました。貴方がよからぬ方ではないかと」

「私をですか」

「そうです」

まさにそうだというのである。

「それで泣きました」

「そうだったのですか」

「私の胸には貴方のお顔がずっとありました」

じつと彼を見詰めての言葉である。

「それはとても」

その時メフィストとマルタはさらに話していた。二人は立ってそのうえで話をしている。ファウストとマルゲリータがお互いに座っているのに対してである。

第二幕その二

その立つたまままで。二人は話していた。

「古い言葉にあります」

「古い言葉に」

「そうですね。賢い妻は稀だと」

「そうですねですか」

「実際に滅多にいません」

瞑目してみせての言葉である。

「これは」

「それはそうですね。では貴方は」

「私ですか」

「愛というものは」

「何もかも知りません」

まさにそうだとするのである。

「本当にです」

「それではです」

マルタはそのメフィストに対して問う。無論彼が何者なのかは知らない。

「魅惑が欲しくて胸が詰まり夢を見てその身を焼かれたことは」

「ありません」

「またそれは」

そんな話をしていて。その時にはであった。

マルゲリータは恍惚とさえなつて。ファウストに対して問うていた。

「エンリーコ様」

「何でしょうか」

「貴方は神の教えについてどう思われているでしょうか」

「そのことです」

実際の年齢を感じさせる、だがマルゲリータには決してわからないことで答えた。

「明晰な心を持っておられる方の信仰を惑わしたくはありません」
「信仰をですか」

「そうです。私は愛する人に全てを捧げます」
「まずは信仰です」

しかしマルゲリータは純粹に言うのだった。

「それではないのですか？」
「私にとってはです」

今の彼の言葉はであった。

「聖人達の言葉ではなく」

「その言葉ではなく」

「それは今の私にとっては私の求める真実に対するからかいです」
「そんなものでしかないという。」

「また誰なら私は神を信じていないと言えるまで大胆なのでしょうか」
「それは」

「私は貴女に求めます」

マルゲリータをじっと見詰めての言葉である。

「先ず心を満たされることを」

「それをなのですか」

「そうです、それをなのです」

こつマルゲリータに話す。

「言葉に尽くせない真の愛の鼓動をです。そして」
「そして？」

「それからその法悦を」

「法悦を」

「自然とも愛とも神秘とも」
「言葉を続けていく。」

「生命とも神とも呼べばいいのです」

「そうされよというのですか」

「そうです。実感に比べたら」

「それと比べたら」

「名前や言葉は煙や噂に過ぎません」

「左様ですか」

「それで」

今度はマルゲリータ自身に問うた。

「貴女は御自身の家ではどうなのでしょう？」

「私の家ではですか」

「はい。そこではどうなのでしょう？」

「私の家は小さく」

そう話していく。

「そして菜園や食事や家計を見えています」

「そういったものをですか」

「常に見えています」

そうだとするのである。

「私のです」

「左様ですか」

「糸車も使います。母は厳しいですがそれでも幸せに穏やかに過
しています」

「では」

糸車と聞いてだ。ファウストはそれに話を合わせて述べた。

第二幕その三

「その糸車で」

「糸車で」

「貴女の心と私の心を合わせつぐめないだろうか」

「それは」

「できないと」

「母がいますので」

ファウストから顔を背けての言葉だった。

「ですからそれは」

「心配はいらない」

こつ言つてであつた。その懐から一個の小さな薬瓶を出して言うのであつた。

「これを」

「これを？」

「これを飲めば御母上は深い眠りに落ちますので」

「そのお薬で、ですか」

「そうです」

にこやかに笑つて話すのだった。

「だからどうか」

「私は世の中のことや愛のことははじめてで何も知りません
そつだというのである。

「ですが」

「ですが」

「不思議な、ですが親しめそうな風を感じます」

こつファウストに話していく。

「それが私の心に吹き込み」

「心に」

「その風を感じます」

「それはです」

「それは？」

「気高い望みです」

彼の心についての言葉だった。

「生の聖なる奇跡です。終わりのない愛の奇跡です」

「愛の奇跡なのですか」

「そうです、そして貴女も」

「私もまた」

こう彼女にも話を回していく。

「同じなのです」

「同じなのですか」

「ですからこれを」

「はい、それでは」

その薬を遂に受け取った。そうしてじっとファウストを見詰める。

そうしてから。ファウストを恍惚とした顔で見詰めて。

「貴方と共に」

「有り難うございます」

その後ろではメフィストが楽しくマルタと話していた。

「ではまた」

「はい、御会いしましょう」

彼はお互いにわかつている戯れの愛を楽しんでいた。二組の愛が動いていた。

ブロッケン山。荒涼として木の一本もないその不気味な山に今恐ろしい歌声が聴こえてきている。それは人間のものかどうかさえ怪しいものであった。

そしてその中でだ。メフィストがファウストに対して話していた。
「博士」

「この歌声は」

「気になりますか？」

「人のものなのか？」

いぶかしむ顔で悪魔に問うのであった。

「私の知っているどの言葉でもないようだ」

「魔界の言葉です」

そうだと話す。黒い空に赤い月がある。その月は鈍い光を放っている。

それに照らされているのは奥の山の影とブロッケンの不気味な岩達だ。その山自体がまさに魔界であり異形の歌声がそれをさらに醸し出していた。

その二人の前にだ。不気味な青白い炎が出て来た。

ファウストはそれを見て言うのだった。

「鬼火か」

「そうです」

「鬼火よ」

ファウストはその鬼火に対して告げた。

「ここは暗い。私達を照らしてくれ」

「はい、それでは先に」

メフィストがすつと右手を前に出すとそれで鬼火は二人の前に来た。そのうえで照らしてきた。それを明かりにして前に進んでいく。

第二幕その四

するとであった。声がさらに聴こえてきた。ファウストはその声を聴いてまた言った。

「この言葉は」

「ドイツ語です」

「そうだな」

それは彼にもわかることだった。

「間違いなく」

「その通りです」

「しかしドイツ語だけではないな」

多くの言葉がありそれを聴いているうちにわかったのである。

「フランス語にイタリア語、英語にスペイン語もあるな」

「言語にもお詳しいですね」

「若い頃に学んだ」

そうだというのである。

「ラテン語から学べばそれで簡単に収められる」

「そうですね。まずはラテン語ですから」

「うん。さて」

「さて？」

「この歌声は魔女達のものか」

「その通りです」

その聴こえてきた女達の歌声について話すメフィストだった。

「ここで魔女の宴が開かれますので」

「そうだな。この山こそは」

「ですから」

「それに他の声も」

ファウストはそのことにも気付いた。

「あるな。これは先程の言葉も入っている」

「私の同志達もいます」

「そうなのか」

「登ろう」

「そうだ登ろう」

ここで魔女達の声が聴こえてきた。その不気味な歌声である。

「そして魔王の下へ」

「魔女と悪霊の宴の夜は今じまったばかり」

「それでは今から」

「この長い夜を楽しもう」

こう歌っていた。二人もその中に入るのだった。

その中で今度は魔法使い達の声が聴こえてきた。

「この楽しい宴を」

「心から楽しもう」

「赤子の丸焼きや血のワインでも出るのか？」

「そんなものはありませんが」

メフィストはそれは否定した。

「普通に御馳走とワインを楽しみます」

「そういったものはないのか」

「ないです」

「そうか。話に聞いていたことと違うな」

「あれは噂です」

メフィストはこう言ってそれを否定した。

「天使達が流した嘘です」

「そうだったのか」

「それでなのですが」

「うん、この宴だね」

「ここです」

ある開けた場所に来た。そこに多くの者達がいた。

悪魔もいれば魔女達も魔法使い達もいる。多くの者達が黒い服を着てそこに集まっていた。

「今こそはじまった」

「この宴が」

「さあ歌おう」

「そして飲もう」

「さて」

メフィストが周りに対して告げた。

「我が僕達よ」

「おお、メフィストーフェレ」

「こちらに来られたのですか」

「今宵の宴に」

「そつだ」

まさにそつだと返すのであった。

第二幕その五

「それでだ」

「ではワインを」

「そして駱駝のを踵を」

「それに鶯の舌を」

「孔雀の脳味噌を」

「ローマ時代の馳走だな」

それを聞いてまた呟くファウストだった。

「これは」

「本当によく御存知ですね」

「昔の文献で出ていた」

またメフィストに話すのだった。

「これもまた」

「ふむ。では味は」

「いや、それは知らない」

ただ読んだだけだということである。

「残念だが」

「他にも色々とありますが。ヤマネもありますしウズラも」

「他にもありそうだな」

「勿論です。そうしたものも如何ですか？」

「そうだな。貰おうか」

こう話をしてであった。ワインや様々な御馳走が二人に出される。二人はその中でそういったものを食べながらであった。そのうえでメフィストはガラスの珠を出してきたのだった。

「これですが」

「ガラスだな」

「ただのガラスではありません」

そうだというのである。

「ここに何が見えますか？」

「世界が」

それがだという。

「空で丸く上がったたり下がったりしているな」

「跳ねたり光ったりしていますね」

「そうだな、それに」

ファウストはさらに見ながら話した。

「太陽の周りを光が回り」

「震えて吼えて作って壊したり」

「これが世界なのか」

ファウストはその光を見てまた話す。

「これがか」

「時には何も産まず時には多く産みます」

「時によって」

「その巨大な背中の上に一族がいます」

メフィストの言葉が変わった。

「一族？」

「猥雑にして狂った高慢にして小心な」

「ふむ」

「不実にして卑しい一族がです」

いるというのである。

「そしていつ何時も邪悪の世界の端から端まで貪る一族がです」

「我々の人間のことだな」

「悪魔もです」

自分達もなのだという。

「その我々も奴等には空虚なほら話であり地獄は冗談の嘲りであり」

「そうしたものだと」

「天国はましてや」

「ましてや？」

「愚弄と嘲笑でしかありません」

天国についてはかなりそうだった。

「そんな人間と我々ですが」

「我々は？」

「最後の審判の日まで同じです」

「さあ踊ろう」

「歌おう」

メフィストがそのガラスを収める中でまた騒ぐ周りだった。

「世界はまた隠れた」

「それではその隠れた世界の中で」

「また騒ぐ」

「これが喜びか」

ファウストはその騒ぎを冷静に見ながら述べた。

「これが」

「まあそのうちの一つではありません」

メフィストもそれは否定しなかった。

第二幕その六

「他にも多くありますが」

「そうなのか」

「はい、そうしてです」

ここでファウストに杯のワインを出して勧めてきたのだった。

ファウストはそれを受け取って飲む。そして前を見たがここで遠く何かを見るのであった。それは。

「！？あれは」

「どうしたのですか？」

「あれは一体」

その見たものを指差しながらメフィストに告げる。

「何なのだ？」

「あれですか」

「そつだ。あのかすんだ空にだ」

その暗い空に見ているのだった。

「蒼ざめた悲しい娘が見える」

「あの娘ですか」

「鎖で縛られた足をゆっくりと引き摺っているが」

その娘は空を歩いている。その鎖で縛られた足で、である。

「あれは一体」

「死にゆく者の魂ですな」

「マルゲリータか？」

ここで気付いた彼だった。

「あれはまさか」

「違うのでは？」

「いや、間違いない」

目を凝らす。彼には間違いなくマルゲリータに見えた。

それを確かめるとだった。さらに言わずにはいられなかった。

「何故だ、何故ここに？」

「あれは天国に行く霊達か」

メフィストは彼女が空を歩いているのを見て残念そうに言う。

「地獄に落ちるのならここに来るのだから」

「天国に行くというのならだ」

ファウストは彼のその言葉を聞いて述べた。

「何なのだ？あの死者の様に見開いた瞳に白い肌は」

「死せる魂ですから」

「何故だ、何故マルゲリータが」

「まあ博士」

メフィストは嫌な予感がしてそれでファウストにまた杯を出してきた。

「また飲んで下さい」

「いや、いい」

「そう言わずに」

「今はいい」

彼は手でもそれを拒絶した。

「それはだ」

「ですが」

「あの首飾りは何だ？」

ファウストはその死者の首にも気付いた。遠目だがよく見えていた。

「あの血の筋の様なものは」

「首が切れているのですね」

「首が？」

「ペルセウスに切られてですね」

「何故だ」

それを聞いてさらに言うファウストだった。

「マルゲリータが首を何故」

「それでなのですが」

メフィストはさらに嫌なものを感じて彼に言った。

「これからはさらに踊りが」

「メフィスト」

ファウストは真剣な顔でメフィストに顔を向けてきた。そのうえで
の言葉である。

「御前は私と契約しているな」

「はい」

契約という言葉を出されるとだった。肯定せざるを得なかった。
彼としてもです。

「それはその通りです」

「ならだ。私をマルゲリータの元に連れて行ってくれ」

「あの娘のところにな」

「そうだ、今すぐだ」

それは最早命令だった。

「今すぐだ。いいな」

「わかりました」

契約は契約であった。それは決して破ることはできない。悪魔に
とって泣き所である。メフィストは溜息と共に頷いてそのうえで、
であった。ファウストに対して答えた。

「では彼女のところに」

「連れて行ってくれ」

「わかりました。それでは」

こうしてファウストはすぐにマルゲリータのところに向かうのだ
った。メフィストはその中で一人呟くのであった。

「まさかこの博士は」

嫌な予感がしていた。しかし今はそれを言わずにだ。彼をその場
に案内するのであった。

第三幕その一

第三幕 死と救済

牢獄であつた。褐色の冷たい壁にはあちこちにひび割れがあり今にも崩れそうでありながらそれと共に絶対の堅固さも見せていた。その壁のランプが朧な光を放っている。その牢獄の中の鉄格子の中の一つにだ。彼女がいた。

マルゲリータである。彼女はその牢獄の中に白いぼろぼろになつた服で蹲っている。髪は乱れ目も視点が定まっていない。異様なまでに憔悴しきつた顔で言っていた。

「あの夜、海の底に私の赤ちゃんを皆が投げ込んで」

「こつ錯乱した様に呟いていた。」

「なのに私がしたと。誰もが言つて」

「最早現実がわからなくなつていた。」

「寒く暗いこの場所で私の心は森の雀の様に飛んでそれで。けれど」
「ここで言葉が変わつた。」

「お母様は長い眠りについているだけなのに私がお母様に毒を飲ませたと皆が言つて。赤ちゃんもお母様も私が殺したと責める。何故だというの」

「こちらです」

「そうか」

その彼女の部屋の前にメフィストとファウストが出て来た。メフィストはその前で彼に顔を向けて告げてきたのである。

「こんな、何故なんだ」

「気が狂つたようですね」

「救えるか？」

「まずはです」

「ここでメフィストはファウストにクールに告げてきた。」

「御聞きしたいことがありますか」

「何だ？」

「この娘をこうしたのはです」

寒い牢獄の中がさらに冷たくなる言葉であった。

「誰なのですか？」

「誰かだと？」

「そうです。誰かです」

このことを彼自身に問うのである。

「誰かです」

「それは」

「まあ私はです」

ここでこの責めを中断してだ。今度はこう言ってきたのであった。

「私にできることはしますが」

「そうしてくれるか」

「既に看守は眠らせてあります」

この辺りは実に抜かりがなかった。

「それに鍵も」

「もう用意してあるのか」

「これ位は造作もないことです」

ファウストに対して鍵を出してきた。それを握らせる。

「それに魔力でここからすぐに去ることもできます」

「では私は彼女を」

「それは貴方の思われるままです」

そのことについてはファウストに対して判断を委ねるのだった。

「では私は一先これで」

「何処に行くんだい？」

「姿を消します。では」

こう言ってファウストに鍵を完全に手渡して姿を消した。白い煙となって消えたのである。

ファウストはそれを見てだ。すぐに鉄格子を開けてそのうえで牢の中に入ってである。マルゲリータのところに来て声をかけるので

あつた。

「マルゲリータ」

「ひっ!?!」

だが。マルゲリータは彼のその言葉を見て驚きの声をあげたのであつた。

「あの人達が。どうかお許し下さい」

「お許し下さいって」

「死にやくありません、まだ」

こう言つて身体を屈めて怯えるのだった。

「ですからどうか。お許し下さい」

「いや、違う」

その変わり果てた彼女に戸惑いながらも言つたファウストだった。

「私は君を助けに来たんだ」

「貴方は」

「マルゲリータ」

「どうか静かに」

「私にお慈悲を？」

「そうだ」

またマルゲリータに告げた。

「だからここは」

「もう一度」

ファウストの顔を見上げての言葉である。

第三幕その二

「もう一度仰って下さい」

「もう一度？」

「はい、御願います」

こう彼に言っていく。

「どうかもう一度。私を救って下さるのですね」

「そうだ」

彼女に言われるまま答えた。

「だから急いで」

「もっと近くに」

しかし彼女は今はこう言うだけだった。

「もっと近くに。このまま」

「急がないと」は

「どうか私に口付けよ」

その焦点の定まらない声での言葉だ。

「どうかここで」

「早く」

「貴方は私を」

その目でさらに言ってきた。

「私をどう思っておられるのですか？」

「どうかって？」

「この私を。どうだと」

「マリゲリータではないのか」

ファウストは今の彼女の言葉の意味がわからなかった。眉を顰めさせて問い返すことしかできなかった。

「違うというのか？」

「私は母を毒で殺しました」

「まさか本当に!？」

彼がやった毒で、であった。間違いなかった。

「あの毒を」

「そして私の幼な子を」

「私の子だ」

それも聞いて愕然となった。このことも間違いなかった。

「それでだ」

「海に沈めました。それで御願いがあってなのですが」

「御願ひ。何だというのだ？」

「私のお墓の用意を」

虚ろな顔での言葉だった。

「それを用意して下さい」

「何故そんなことを言うのだ」

「深い緑の土の中に。墓場で最も美しい場所に」

マルゲリータの言葉が続く。

「そこにお母様と赤ちゃん。そして私が」

「いや、それよりもだ」

もう聞いてはいらなかった。それでその言葉を遮って告げるの

だった。

「今はここに」

「いえ、扉は」

「扉は？」

「地獄に向かう場所だから」

「こう言って首を横に振るのだった。」

「それで行くというのは」

「駄目だというのか？」

「私は貴方と一緒にには行きません」

「そつだというのである。」

「生きることが私にとっては悲しみだから」

「生きることが。何故なんだ」

「誰かに乞うてそのうえで犯した罪を感じながら生きていくのは」

「それはない」

ファウストは彼女の言葉も考えも遮ろうとした。

「だからここで」

「それでは私は」

「さあ、今すぐに」

「二人で」

「さあ、行こう」

そうしてだった。二人で話すのだった。

第三幕その三

「大海原の向こうの潤いを含んだ海の香気の中に」

「海草と花と空の間に」

「人知れぬ安らぎの港が見えるね」

「はい」

ファウストは誘っているだけだがマルゲリータは実際に見ていた。

「見えます。青い小鳥達も」

「それは晴れた空の向こうで虹に囲まれて太陽の笑みを映している」

こうマルゲリータに話す。

「そこでわたし達は希望に満ち新たな場所を求めかが椰子く」

「その島に向かうのですね」

「そうだ、遠くに」

「博士」

ここでまたメフィストが出て来た。そうして自分に顔を向けてきたファウストに対して静かに告げるのだった。

「もう夜明けです」

「悪魔……」

マルゲリータは彼の姿を見て顔を青くさせた。

「どうしてここに」

「早く」

ファウストはまたマルゲリータを急かす。

「急ごう、すぐに」

「私を見捨てないで下さい」

「だから早く」

「これはもう駄目だ」

メフィストは最早錯乱し何もかもができなくなっているマルゲリータを見てすぐに見切った。そうしてファウストに対して言うのであった。

「ほら、もうラッパの音が」

「ではすぐに」

「はい、すぐに」

確かにラッパの音が聞こえてきた。一刻の猶予もなかった。

「行きましよう」

「マルゲリータは」

「悪魔、来ないで」

メフィストを見て怯えるばかりであった。

「私のところから。どうか去って」

「太陽が姿を出します」

また言うメフィストだった。

「ですから早く」

「落ち着くんだ」

ファウストは何としてもマルゲリータを救おうと声をかける。

「どうか。本当に」

「神よ、お救い下さい」

マルゲリータは今度は祈りはじめた。

「どうかこの私を」

「祈るよりも早く」

また急かすファウストだった。

第三幕その四

「そしてこの牢獄から」

「斧が」

だが。マルゲリータはまた見たのだった。

処刑の斧が自分の首に落ちて来るのをだ。それを見たのである。

それでまた怯えてだ。錯乱した声で喚く。

「私への処刑が。ここで」

「とにかく早く」

「去りましょう」

ファウストはマルゲリータの手を掴むが彼女は暴れて逃れようとする。そしてメフィストはしきりにファウストをせつついて言うてくるのだった。

「早く、急がないと」

「悪魔が出て何をするというの？」

マルゲリータはまた怯えて叫びはじめた。

「この神聖な場所で」

「馬鹿な、牢獄が神聖だと!？」

「何もかもわからなくなっているのです」

メフィストがファウストに告げてきた。

「ですから」

「ではどうしたら」

「もうこれはどうしようもありません」

首を横に振つての言葉である。

「ですから二人で」

「夜明けが」

牢獄の中も少しずつ明るくなってきた。それが何よりの証であった。

「薄明かりが。これが最後の一日なのね」

「違う、これからなんだ」

「私達の輝かしいはじまりの日になる筈だったのに。この世では
「何故こうなるのだ」

「私を愛してくれて」

苦しむ顔のファウストに対しての言葉だ。

「どうかそれを」

「それを？」

「覚えておいて。私が貴方に心を捧げたことを」

「わかった、じゃあ」

「そして神よ」

今度は上を見上げての言葉であった。

「私をお許し下さい。どうかこの私を」

「もう終わりだ」

メフィストはその彼女を見て呟いた。

「間も無く命が消える」

「何故だ、何故こうなるのだ」

「御覧下さい」

メフィストがマルゲリータを指し示すとだった。彼女はゆっくりと崩れ落ちた。そうしてそのうえで弱々しい声で一人呟いたのであった。

「これで私は」

「そう、救われた」

「彼女は救われたのだ」

天上から声がした。天使達の声である。

「神は許された」

「この気の毒な娘を」

「そうなのか」

ファウストは崩れ落ちたマルゲリータを見ながら呟いていた。

「それがせめてもの救いか」

「では博士」

メフィストは呆然となっている彼に告げてきた。

「これで」

「去るといふのか」

「はい、では」

二人はすぐに姿を消した。後に残ったのはマルゲリータだけである。崩れ落ちた彼女の亡骸を何処からか出て来た白い光が照らしていた。その天使達の光が。

第四幕その一

第四幕 ファウストの死

青く澄んだ美しい川である。その周りは草木、それに様々な色の花に包まれ優しい青色の月の光に照らされている。その川の中に小舟があつた。

小舟の中に美しい男女がいる。そして共にいる青い髪の小川の精霊達に囲まれながら手と手を取り合つてそのうえで愛の言葉を紡いでいた。

「エレナ」

「パンタリス」

男と女は見詰めあいながらそれぞれの名前を呼んだ。

「動きを止めた月が優しい青い光で照らし」

「香油がかぐわしい香りを起こし」

「そして今精霊達が共にいて」

その共にいる精霊達のことも言う。

「そして白鳥達も」

「ええ、白鳥達も」

見れば小舟の周りに白鳥達が来ていた。囲む様にして泳いでいる。

「そしてその中で私達は」

「ここで歌い」

「清らかな中で」

パンタリスが周りをうつつとりとした顔で見て言った。

「精霊達よ」

「川の精霊達よ」

エレナも言う。

「歌を」

「セレナーデを」

その彼等を遠くから見ている者達がいた。ファウストとメフィス

トである。ファウストは愛の中にいる彼等を見てそのうえでメフィストに対して言うのだった。

「あれは」

「御存知だと思いますが」

「パンタリスとエレナか」

「はい」

まさにその通りだというのである。

「あのトロイアのです」

「そうだな。あの二人がここに」

「人の世では結ばれなかった二人ですが」

「しかしこの世界では」

「ああして永遠の愛を楽しんでいるのです」

言いながらその手に黄金の林檎を出してみせた。それをファウストに差し出して言うのであった。

「如何ですか？」

「そのトロイアの黄金の林檎か」

「はい、この林檎は絶品ですが」

「かつて神々が食べた林檎を」

「如何ですか？」

そのことを尋ねるのである。

「宜しければ」

「それなら」

その林檎を受け取ってである。食べてみるとであった。普通の林檎よりもさらに美味かった。ファウストは林檎を食べながら二人を見続けていた。

「董の花が咲き乱れ」

「精霊達が歌い」

二人はその恍惚の中で言葉を交えさせている。

「この月の中で」

「永遠に」

「さて」

メフィストは二人を見ながらファウストに声をかけてきた。

「この世界はです」

「神話の世界だね」

「そうです。如何でしょう」

「夢の中にいるようだ」

ファウストは素直に己の感情を述べた。

「ここにいることは」

「そうですね。そして」

「そして？」

「これは忠告になります」

こう前置きしての言葉である。

「それも賢明な」

「賢明な？」

「私達二人は今にいますが」

「うん」

「それでも自分達の運をそれぞれ別方向で見えています」

「そうだというのである。」

第四幕その二

「このことを忠告させて頂きます」

「別のものをか」

「しかし」

「ここでメフィストは顔を顰めさせて言っているのであった。

「ここはです」

「ここは？」

「今一つ合いません」

「こつ言つのである。」

「どうも」

「どうもですか」

「そうですね。ブロッケンで魔女達と共にいるとです」

「その方が君の性に合っているのかい」

「私は神聖ローマの風土が合っていますね」

「そちらの方だという。彼の言葉である。」

「はつきり言いました」

「帝国の方がかい」

「イタリアもそうですがギリシアには馴染みがありません」

「縁がないのかい」

「やはり帝国です」

「そこだというのである。」

「どうもです」

「そこなのかい」

「ですから」

「さらに言つ彼だった。」

「ここの香りも好きにはなりません」

「花や香油の香りも」

「あのハルツ山のごつごつとした匂いに刺激の強いタールや樹脂の

匂いの方がです」

「ああした香りの方がいいのかい？」

「博士は違いますか？」

「私はこの方がいい」

「そうだといいのである。」

「イタリアも好きだが」

「帝国の人間はイタリアが好きですね」

「それは否定しないよ」

「はっきりと答えたファウストだった。」

「正直なところね」

「イタリアのあの晴れやかな空も爽やかな風も好きではありません」

「帝国のあの寒く暗い世界がいいのかい」

「そうですねですよ。私が」

「そんなにいいものか」

ファウストにはわからない話だった。それで首を傾げさせていた。

その彼のところにある。

「ようこそ」

「魔神ね」

「北の国の」

川の精霊達が二人のところに来た。そのうえで声をかけてきたのである。

「そこから来たのね」

「ようこそ」

「そちらの綺麗な方は」

「ファウスト博士という」

メフィストはやや勿体ぶった口調で精霊達に彼を紹介した。

「帝国の高名な学者だ。」

「学者さんなのね」

「見たところ立派な方だけれど」

「そう、そしてだ」

「そして？」

メフィストは精霊達に対して問う。

「エレナ王妃は何処かな」

「王妃様だったら」

「パンタリス様と一緒にいるけれど」

「あれ？」

小舟の方を見るとだった。彼女はいなかった。パンタリスもである。

「どちらに？」

「どちらに行かれたのかしら」

「私はここに」

するとそこにであった。そのエレナが出て来たのであった。優雅な微笑みを浮かべてそのうえでファウストの前に来ていた。

第四幕その三

「凜々しい方ですね」

「この娘達にも話したが」

メフィストは今度はそのエレナにファウストを説明しだした。

「この方はファウストといって帝国の有名な学者で」

「では頭の方も」

「最高の頭脳を持っておられる」

「こう紹介するのだった。」

「それは私が保障する」

「伝説の美女エレナが」

ファウストはそのエレナを見ながら話していた。

「今私の前に」

「如何でしょうか」

メフィストは恭しくファウストに問うてきた。

「彼女は」

「何と美しい」

「こう答える彼だった。エレナの顔を見て恍惚となっている。」

「まるで月の様だ」

「今空にある青い月の様に」

「そう、その通りだ」

エレナを見ながらメフィストの言葉に答える。

「神話にある以上の美しさだ」

「有り難うございます」

エレナはファウストのその言葉を受けて優雅に微笑んできた。

「そのお言葉受けさせて頂きます」

「それはどうも」

「そして」

「そして？」

「ここで私は言いますよ」

エレナを見ながらの言葉である。

「貴女に対して」

「私に対して」

「そう、貴女に対してです」

こう言ってからであった。

「永遠の美の理想を現わす貴女に対して」

「そこまで仰って下さるとは」

「一人の男が今貴女を見ています」

そうしているというのである。

「そして」

「そして？」

「その目を見せて下さい」

こうも言ってみせたのである。

「その目をです」

「私の目を」

「月の如く清らかに美しく太陽の様に激しい」

それがエレナの目だというのである。

「その目をです」

「では私もまた貴女に」

「私は忘れるべきなのか」

しかしここでファウストはふと呟いた。

「彼女のことを。もう」

「それでは私達は今は」

「愛がここでもまた」

「生まれようとしているのね」

その二人を見た川の精霊達はこう言っただった。

「新たな愛が」

「ここで」

（私は）

今度は心の中で呟くファウストだった。

(マルゲリータを)

「ふむ、どうやら」

メフィストはその彼を見て呟いた。

「これは今一つだな」

「私は」

ここでまた言うファウストだった。

「貴女を美しいと思っています」

「はい」

「ですが」

ここで、あつた。言うのであつた。

「それでもです」

「どうかされたのですか？」

「今は貴女をそう思うだけです」

それだけだというのである。

「美しいと」

「それで充分でないのですか？」

「いえ、そうではありません」

その言葉は何処か醒めている。

第四幕その四

「私は貴女を愛する気持ちはありません」

「それはこれからでは？」

「いえ、ですが」

ですが、というのである。

「私はそれでも」

「愛して下さらないのですか？」

「やはりな」

今の彼の言葉を聞いて納得しているが残念な顔で呟くメフィスト
だった。

「これでは」

「ですから今はここで」

「ここで？」

「宴を楽しみましょう」

そうするだけだというのである。

「それを」

「宴をですか。愛ではなく」

「はい、宴です」

あくまでそれだというのである。

「宴をです」

「わかりました」

エレナは残念そうだったがそれでも頷いた。

「それでは私もまた」

「宴を楽しんで下さいますね」

「はい、それで」

「では私達も」

「まずはお酒を用意して」

「そして御馳走を」

ニンフ達はその周りで口々に言っていく。

「そうしましょう」

「今ここで」

「そして私達も」

「今はそれしかないな」

メフィストも妥協であったが決断を下した。そのうえでの言葉である。

「それでは博士」

「うん」

「宴を開きましょう」

こうファウストに対して告げるのだった。

「それで宜しいでしょうか」

「わかった」

そしてファウストもそれでいいとしたのであった。

「それじゃあ今から」

「先程は黄金の林檎を出しましたが」

そのことも話す。

「今度です」

「何だというのだい？」

「黄金酒にそれと幾ら食べても尽きることはない肉に」

そうしたものを出すという。

「あとは黄金の葡萄で如何でしょうか」

「神の食べる御馳走をか」

「そうです、ギリシアの神々の御馳走をです」

それをだというのである。

「それで如何でしょうか」

「わかったよ。それじゃあ」

「はい、それでは」

それに頷いてであった。こうして話を決めてだった。

メフィストが右手の親指と人差し指を鳴らすとそれで美酒が入っ

た杯と肉が置かれた皿が出て来た。それに葡萄もだ。どれもオリハルコンの皿である。

その上の美酒と馳走を一同で食べていく。しかしファウストの顔は何処か空虚でありメフィストもそれを察して難しい顔をしていた。何かが決定的に変わってきていた。

ファウストの書斎である。彼はその自分の書斎の机に座って物思いに耽っている。そしてその後ろにはメフィストが立っていた。相変わらず赤いタキシードに赤いバイオリンケースを背負ってキザな出で立ちである。

「巡れ巡れ」

メフィストは立ちながら言っていた。

「尊大な思考よ」

「私はだ」

ファウストはメフィストに背を向けながら述べていた。

「多くの世界を回ってきた」

「その通りです」

メフィストも彼の言葉に応えて述べる。

第四幕その五

「実に多くの世界を」

「そうだ。しかしだ」

「しかし？」

「この世の幻想も見た」

それもだという。

「そして飛び行く欲望の髪を捕まえてきた」

「愛の歌よ」

メフィストもここで言う。

「魅惑と栄光の記憶よ。あの誇り高い魂を滅びへと連れ込むのだ」

「多くのものを見てきた」

「博士」

ファウストに対してさらに言ってきた。

「それでなのですが」

「うん、一体」

ファウストは物思いに耽ったままだ。彼の方を見ようとせず背を向けたままである。

「何なんだい？」

「貴方は欲し楽しめましたね」

「そうだったな」

昔を懐かしむ言葉を出しはした。

「思えば」

「しかしまだ言っておられませんね」

「何をだい？」

「あの言葉をです」

それをだというのである。

「過ぎ行く瞬間に向かって」

「その言葉は」

「止まれ、御前は美しい」

この言葉であった。

「この言葉をです」

「私はあらゆる人間の神秘を味わったが」

ファウストの言葉には明らかに『だが』があつた。

「現実も理想も乙女の愛も」

「まさに全てをです」

「だが現実は苦しみであり理想は夢だった」

そうであつたと。遠いものを見ながら語るのであつた。

「人生の最後のそのまた最後の時に踏み込んで」

「それから？」

「つまり夢の中で魂は既に喜びに浸っている」

「ではあの言葉は」

「しかしだ」

また言葉を暗転させるのだった。光から闇へ。

「無限の広がりを持つ静かな世界の王」

「それが貴方だと」

「私は豊かな実りを産む人々にだ」

その彼等に思いを馳せてである。

「この命を捧げたい」

「そうしたことをして何になるのですか？」

「私は賢明な規律と共に多くの人々や羊達、そして家や畑や町が生まれ出ることを望む」

「創造ですか」

それについては何の意味も持たない、メフィストは悪魔としてそれを否定しようとした。実際にその言葉にはシニカルなものを含ませてきていた。

「そうしたものはず」

「意味がないというのだな、君は」

「全ては美しい破壊の後にあるのです」

「こう言うのである。」

「既成のものを全て壊してです」

「壊すことはない」

ファウストは前を見ながら述べた。

「それはだ」

「ないというのですか？」

「そう、ないんだ」

あくまでこう言うのだった。

「この夢が私の生涯の聖なる歌であり最後の希求であることを」

「どうだというのですか？」

「それを望んでいるのだ」

これこそが今のファウストの望みであった。

「私は私の夢が人生の聖なる歌であることを望んでいる」

「嫌な予感がする」

メフィストはそれを聞いて首を捻りだした。暗い顔になってである。

第四幕その六

「まさかとは思うが」

「これは」

ファウストは上を見上げた。

「光が見える」

「やはりか？」

その彼を見て顔を顰めさせるメフィストだった。

「ここで善を見るのか？」

「光り輝く丘の上に輝かしい人達がいる」

「まさにそれだ」

「空に賛歌が聞こえる」

「悪魔の歌では間違いなくない」

確信せざるを得ない言葉だった。

「それでは」

「かくも輝かしい黎明の聖なる光の中で」

ファウストは上を見上げながら恍惚とじだしていた。

「至福を感じている。私は自分の中で気高い言葉に尽くせぬ時を感じている」

「用心しなければ」

メフィストはいよいよ身構えていた。

「善と悪、どちらが勝つかわからない」

「私はあの中に」

「博士」

悪魔はすぐに彼に後ろから声をかけた。

「宜しいでしょうか」

「何だい？」

ここでも彼には顔を向けなかった。

「今一体何を」

「お好きな場所へ」

旅を勧めてきたのである。

「どちらに行かれますか？トルコですか？それとも東のヒーナですか？」

「あの国にか」

「そう、あの国です」

中国のことである。中国のドイツ語読みがヒーナなのである。

「あの国に今から」

「いや、今はいい」

「あの国程豊かな国はありませんよ」

「いや、それはいい」

そう言うしかないファウストだった。

「それはもう」

「いいのですか」

「今の私は」

彼がこう言うのであった。すると。

上からである。声がしてきたのであった。

「幸いなるかな」

「我等の主よ」

「天使に聖人達よ」

「そしてこの世の主達よ」

「やはり来たか」

その声と上から降り注ぐ光を受けていよいよ眉を顰めさせるメフィストであった。

「ここで」

「さあ、今こそ祝福を」

「我等の主よ」

「博士」

メフィストは書齋の中を一変させてみせた。緑と紅の世界であり緑の草原の中に淡い紅のもやが漂い香りは薔薇のものである。実際

に周りには薔薇が咲き誇っている。

第四幕その七

そして近くに青い海が見えそこから濃い青の髪の毛の半裸の美女達が来ていた。悪魔はそれを見せたうえでファウストに囁くのであった。

「御覧になつて下さい」

「何をだい？」

「この美しい世界を」

彼が今出した世界をだというのだ。

「この世界をです」

「いや、今の私は」

「愛の歌を聴くのです」

その美女達の愛の歌をである。実際に彼女達は艶かしい身体で艶やかな歌を歌っていた。

「かつて貴方が楽しまれたものを」

「そう、かつてだ」

「今もです」

そうだというのである。

「ですからこの世界へ」

「主よ」

「聖人達の主よ」

また天使達の声が聞こえてきた。そして彼等もまた姿を現わしてきた。今地上は悪魔が出した美の世界があり天はその天使達が輪になつてそのうえで光の中で歌っていた。そしてファウストはそれを見てである。

「止まれ」

「止まれ！？」

「御前は美しい」

ついに言ったのである。

「御前は美しい」

「馬鹿な」

ファウストのしているものを確かめてだ。メフィストは啞然として呟いた。

「何故だ、何故こんなことが」

「そう、御前は美しい」

また言うファウストだった。

「永遠に」

「翼のある黄金の天使達の主よ」

「輝かしい主よ」

「そうなのだ」

ここでファウストは手を伸ばした。そのうえでそこにある福音の書を取ってだ。そのうえでそれを手に持って。

「これこそが私の砦なのだ」

「あれだけの快楽を味わいながらもだというのか」

「慈悲深い神よ」

ファウストはその書を手に言うのだった。

「私を貴方の下へ」

「全ては終わったというのか」

メフィストも今の状況を認めるしかなかった。来てきた。

「まさか」

「聖なるかな、聖なるかな」

「永遠の宇宙の調和よ」

「そう、調和なのだ」

ファウストは輝く彼等の歌声を聴きながら呟く。

「全ては。創造と調和と」

「破壊を否定するというのか。その美しいものを」

「私は賛歌を愛する」

彼が次に愛すると言ったものはこれだった。

「そう、それをだ」

「さあ、祝福を」

「これで」

天使達はあるものをファウストに降り注いできた。それは黄金や青の羽根達であり紅や白の薔薇の花びら達である。そうしたもの而降り注がせてきたのである。

ファウストはそれを静かに受けている。メフィストはもう観念するしかなかった。

「思えばこれも運命なのか」

その羽根と薔薇の花びらを受けるファウストを忌々しげに見ながらの言葉である。

「全ては」

「私は今からそこへ」

ファウストは上を見上げたまま静かに微笑んでそのうえでゆつくりと崩れ落ちた。その顔は穏やかであり満ち足りたものであった。

その彼をだ。降り立った天使達が輪になって囲んで、である。

「さあ、今から救いを」

「この魂を」

「神秘の愛の中で」

彼を見ながらの言葉である。既に書斎ではなかった。天の宮殿の中であった。

「聖なる光に包んで」

「今静かに」

「忌々しいが認めるしかない」

メフィストは達観した顔になって呟いた。

「彼は救われたのだ。ではファウスト博士」

最後に彼を見てだ。優しい微笑みを向けてである。

最後の審判の後で天界で御会いしましょう。また貴方と共にあらゆる場所を巡りあらゆるものを見て楽しみたいものです」

こう言ってその端麗な動作で優雅に一礼してである。天使達に囲まれ光に照らされている彼を見送るのであった。

メフィストーフェレ

完

2010・1・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914o/>

メフィストーフェレ

2011年4月28日00時58分発行